


獨協大学長 殿

学外研修報告書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報告日	2020年9月20日	所属	外国語学部 ドイツ語学科
職名	准教授	氏名	秋野 有紀 
研修種別	①. 海外 2. 国内	研修種類	①. 長期 2. 短期
研修期間	2019年4月1日 ~ 2020年3月31日		
学外における主な研修機関および訪問先 米国・コロンビア大学			
出張目的または研究題目 米国の文化政策、およびアートに対するフィランソロピーの歴史と現状の調査			
資格 ①. 2019年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（ ）			
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額		3百万円	
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入） 研修中は一貫して論文では伺い知れない芸術文化振興の現場の運営や政策方針の聞きとり調査と今後の意見交換・調査の準備にあてた。とりわけ、メトロポリタン歌劇場、アメリカン・バレエ・シアター、ヤング・ピープルズ・コーラス、カーネギー・ホール、ニューヨーク・シティ・バレエ団に関しては、寄付運営担当の方々のお話、公演や定例会議など、寄付者をうながす活動についても参与観察させていただいた。公的資金に頼り近年では資金が慢性的に不足し、質の低下が懸念されてきたドイツの劇場および公的資金			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

も寄付も基盤が脆弱な日本の今後の制度を考える上で、フィランソロピストやフィランソロピー運営担当の実際のノウハウや関心、信念について具体的に現場を知ることができた。とくにアメリカン・バレエ・シアター、ニューヨーク・シティ・バレエ団については私自身がバレエ団のクラスを受けたり、リハーサル、ゲネなどはかなりの数を定期的に参与観察できたため、これもドイツの劇場時代の参与観察の比較とともに時期を見て発表したい。この時期、ニューヨークでは、倫理的にNGな活動・人間から資金が寄付として流れていることが判明し、多くの組織で館長や担当者が変わったが、そうしたリスク管理と対処についても、多くのことを学んだ。報告書を学外ネット公開するとのことで個別のお名前は挙げられないが、日本の総領事館、国際交流基金、日本クラブ、企業の方々からも日本文化の米国での展開について現場のお話を通じて多くの示唆や紹介を戴いた。NYCに住む同世代のフィランソロピストやNEAの研究者らと交流することで、日本の芸術への寄付活動のノウハウに足りない視点やそもそもの組織の違いをゼロから学べた。

大学では、日本の芸術文化、経済、国際政治、米国の連邦制度、ドイツ語教授法を中心に多くの授業を聴講し知識を深めるのみならず、授業課題や図書館のオンライン化などについても、学びが多かった。ドイツ語教授法に関しては、ゲーム化され、アクチュアルな素材が多く使われており、ドイツや日本での授業とは大きく異なる手法や評価基準から工夫の視点を得ることができた。芸術文化、経済に関しては、日本では学んだことのない厚みで、多角的な分析を知ることができ、日本の大学でも日本の芸術文化については同じ水準の内容を全国で必修化してほしいと思うほど、素晴らしい内容の講義が多かった。

また隣接領域については、出発前に聴きたいと思っていた教授陣（スティグリッツ、カandel、レイノルズ教授）の講義・講演のみならず、リベスキント、カーティス教授、クリントン元大統領、ブッシュ元大統領、ルー元財務長官など、学内外の講演会や個人的な面談などで様々な話を聴け、日本やドイツの置かれた状況を相対化することができた。エリーナ・ガランチャ、ルネ・フレミンクのカーネギーでの授業を観察できたことも、日本の劇場ホールの運営やエデュケーショナルの活動の参考になった。メトロポリタン美術館など、NYの文化施設は1年間入場無料で入れたためにインタビューのみならず対外的な活動をきわめて多く観察することができ、公的資金が多く文化を民主化しているドイツ、

寄付頼りで芸術文化は富裕層しか手が届かない米国という一般的先行研究のイメージに対する反証を多く目にした。NYCは特殊とはいえアクティヴな活動と手法に感銘を受けた。

文献調査に関しては、コロンビア大学ロースクール、SIPA、東アジア研究所の図書館に非常にお世話になった。信じられないほど資料が充実しており、ドイツからはアクセスできなかったデータベースなども利用でき、大変役に立った。また一次資料に関しては、ワシントンD.C.の米国議会議事堂図書館、国立公文書館で多くの資料を集めることができ大変有意義であった。シカゴ大学の図書館資料に関しては、予約とやり取りは完了していたものの、COVID-19の拡大で移動が難しくなったために、これは今後の収集としたい。

またゲーテ・インスティトゥートのイベントでドイツ語を学ぶニュー Yorker たちやアーティスト、企業人との交流を通じ、ドイツ語の国際的な力は今日でもきわめて強いことが分かった。特に日本人であるということのみ自己紹介した場合と、ドイツに長く住んでいたことがあるという自己紹介をした場合で、芸術業界の人々の態度が大きく変わったのは興味深かった。NYで多くの聞き取りが可能となったのは、ドイツの文化政策の情報を相手が知りたがったことによるところが大きかった。また対外文化政策の面でも、ドイツ語の地位をかなり強気でアピールする米国での展開方法と、日本での展開方法が全く異なっており、通常は対外文化政策組織の床面積や予算で政策評価の手がかりをする部分も大きいものの、アピールの仕方の文面の違いから多くのことがいえそうであることも今回初めて分かった。

またエビデンス・ベースの文化事業評価の方法に関しては米国国務省の対外文化政策の元担当官が、冷戦時代にフランクフルトでの対独担当官であったためにドイツ語で話ができ、彼女が理事を務めている国際フェスティバルのCFOを紹介してもらった。このフェスティバルは、寄付型というよりは公共型でエビデンス・ベースの成果計測報告を一つの売りにしているため、日本の現在の政策関心も高い領域で先行する団体との交流を開始できたのは、今回の研修で最も有意義なことであった。

以上のように、文化政策の各論領域でも、日独が弱く米国が強いといわれるフィランソロピー、各種の客層・寄付者・年齢対象を対象にした普及活動、教育普及は参与観察により、また政策決定の実情と経緯は、一次資料の収集を中心に、加えて対外文化政策については、日本の政府関係諸機関及び米国の政府関係諸機関の資料および聞き取りなどで

ドイツの政策を相対化する視点を得られた。また日本の歴史・経済についても、外側の視点からある程度ベーシックな知識を整理することができた。

午前中あるいは夕方に大学、昼に文化機関の一般的なWSや様子を観察し、夕方に文化機関の若手活動家などの聞き取り、会食などを4月から3月まで毎日詰め込んだ一年だった。集めた資料を十分に整理する暇もなく、この1年でできるだけだけの資料を集め、直接現場に接して質や組織の動向を知り、今後の調査の準備に充てようと考えていたため、あまりに多くの活動をしすぎていると自分でも思ったときもあったが、3月に現場観察や聞き取りができない状態になり、集めた資料や観察の分析をまとめて行うことになった。

文化機関のフィランソロピー、普及活動、文化施設の教育普及、ドイツ語対外文化政策に関しては、日本の学会誌あるいは紀要などで順次発表していきたい。議会議事堂図書館とロースクールで収集した一次資料に関しては、国際学会と国際学会の雑誌に発表したい。

またNYや米国のフィランソロピーとドイツからの芸術受容に関しては興味深い伝承、証言は見つかったものの、ドイツで標準化された文化機関の文書管理と、NYの民間の巨大文化機関の文書管理のシステムは、体系化されているかどうかという点で大いに異なっていた点で苦戦した。ドイツでは小さな文化機関でも多くの一次資料を保管しており、国全体である程度の水準で保管が標準化されているため、資料の追跡は難しくはなく、不備に関しても研究者が問い合わせることで、機関文書が現在も積みあがっている。けれども巨額の寄付がある大学図書館などは別として米国では状況が異なるということも大きな文化機関の史料管理者から教えてもらった。公立図書館にも、文化機関にも史資料があり、散財のみであればよいのだが、多くの主要資料が時系列から消えていたり、公立図書館の側で整理番号を体系化しておらず、同じ案件のファイルの番号が重複して結局職員ももはやわからないということがあった。そのため、一次資料の裏付けが必要な研究論文にするには、機関のみならず、伝記作家などに資料について尋ねるというアプローチが必要になり、それはそれで極めて興味深いが時間のかかるプロジェクトになると考えている。政策学として、こうした歴史構築の段階からの基礎的な主要史資料の追跡から始めるという状況はこれまであまりなかったため、「歴史学」「文書管理」はドイツといわれるだけあって、これまで恵まれた研究分野にいたことを痛感した。以上のように、様々な点で発見が多い有意義な1年を過ごさせていただいた。